「絵を描く仲間」

東京芸術大学美術学部
先端芸術表現科教授、アーティスト
日比野 克彦

生きるためのエネルギーが想像力。

絵を描く能力というものは想像する力があるからこそ成せる業である。この想像力というものは他者との関係によって鍛えられることもあるが、自己の中で研ぎ澄ますこともできる。想像力というものは人間が本来持ちえている才能であり、生まれた後に教育によって習得する能力ではない。生き物として、恐怖を感じる、享楽を感じることは命を維持するために必要なことである。その感じる能力を持ち得た上で人間は生きて行き、自分の生きている時間の中で体験したものやことを基本にして、その恐怖を回避するために、または、その享楽を再び得るために自分なりに工夫する。そのエネルギーが想像力である。

表現者は想像者が衣を着た姿である。

想像力を得た者がそのイメージを具現化させるために、絵を描く（造形物を造ることも含めて）ことを行った時、表現というものになってくる。この表現は第三者からは均一な評価・反応を得ることは難しい。なぜならば他者と共有することのできない自己の内面の世界がその起因となっているからである。想像するという個々の世界に、絵を描くという共通の手段で可視化しているのが表現である。つまり表現者は想像者が衣を着た姿であるといえる。

衣の下を読み取る。

表現者には、独自の観点や、制作活動の持続性などが求められる。何故ならば、その表現に接した者は、その衣の下の正体を読み取ろうとし、その試みがそれらを要求するからである。表現することによって可視化された想像力は、人目にさらされるようになり、おのずと他者の評判のもとにさらされていく。

グラマラスな想像力の持ち主たち。

障害をもった人たちの、視点のこだわり、そして、どこまでやり続けるのかという持続性などから、彼ら彼女たちは強靭な想像力の持ち主であると感じる。表現という衣が透けてしまっているかのようなグラマラスな想像力を感じる。表現という衣の下の姿を読み取ろうとする行為が無為に思えてくるような可視化されたイメージである。そしてその評判は、透きとおった衣という表現に対しても、グラマラスな想像力という中身に対しても下されていき、評判のいいものとなっている。しかしここでこの評判が評価につながっていくかという点が社会に於いての、また美術界に於いての重要なところである。

作品とはその表現を享受した者が存在した時点で作品になり得る。

表現する行為に於いて、自己の想像力を可視化するということもあるが、もう一点大切なことは、「伝える」という意識的な行為が伴うということである。作者としての表現者は第三者である自分以外の人に

自分の想像力から生まれた表現を伝えてこそ作品というものになっていくと私は考える。だから障害をもった人たちがそれを意識しているかどうかという点が、美術的作品として評価する時の議論の的になるところではある。だが、その表現を享受する第三者が存在するのであれば、その表現は作品として成立するという見方を進めてみてはどうだろうか。進めることにより現代社会に於ける精神的な問題点、芸術に於ける社会性の問題点が互いに自浄し合いだす可能性があるのではないだろうか。

社会が意識の部分を保障する

表現者として求められる、独自な視点、持続的な制作活動を持ちえている彼ら彼女たちからすれば、「第三者に伝える」という部分をその障害のある人たちの傍らにいる者がフォローすることで美術作品としてなり得るという考え方を社会全体で進めてもよいのではないかと思う。障害のある人たちが描いた絵という領域をつくるのではなく、他者に伝えるという意識の部分をコーディネーションしてもらった作品ということであろうか。今回の推進委員会に於いて紹介された障害のある人たちによって描かれた絵は、表現の結果として素晴らしいものがあり、その結果を享受する関係があるのだから、社会が障害のある人の意識の部分を保障して美術作品として社会に受け入れられていくことを、そして流通していくことを推進していくべきだと思う。

健全な社会を築くために必要な芸術の役割

このような社会の保障により美術の作品の幅が広がるということは、美術領域に於いても、より実社会との繋がりをもつことになり、美術・芸術が社会の中で役立つものとして機能していく場を増やしていくことであろう。また芸術というものを捉える人々の意識に於いても、人間として、さらなる美の可能性を得ることが出来る大きなきっかけにもなっていくに違いない。そして、このような社会と芸術の関係の中で育まれる人々の意識こそが、より精神的に健全な社会を築き上げていく上に於いて必要なことなのではないかと私は考える。